

---

# 夢のむこうに。

志眞子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢のむじづこ。

### 【Zマーク】

Z3032F

### 【作者名】

志眞子

### 【あらすじ】

高校生のイチと夏夜。幸せな未来を夢みていた二人の日常はある日を境に崩れ始める。だんだんと色を失つてゆく世界で、夢みたものは…。生きることや、人を大切に思つこととは?

## モノクロームの世界で

「眠れないの？」

「うん 眠るの苦手になつた そのまま…闇に囚われそうで怖い」

「…大丈夫 手 握つててあげる 一人にしないよ」

煙突から煙があがるのを、ただ、眺めていた。

太陽が傾きはじめ、風の冷たさが秋の終りを告げている。闇が広がりはじめ、一つの小さな星だけが光っている。

もうすぐ冬がくるよ。イチ、見てる？

空に向かつて問いかける。返事はかえつてこない。

「夏夜さん」

呼ばれて振り返ると、そこには喪服を着たイチの母、一美さんが立っていた。

「今日はありがとね 今日だけじゃないわね いままでありがとう  
いいえ…私はなにも」

一美さんは悲しそうに静かに微笑んでいる。

「今日 まだ時間あるかしら? よかつたらイチの部屋…見ていつてあげて? 遺品…何かあれば持つていいってあげて」

フフッと一美さんが笑う。

軽く頭を下げ、一美さんの足元をぼんやりと見た。

火葬場からイチの家まで車で四十分。イチのお父さんが運転する車に乗りながら、後部座席でただぼんやりと空を眺めていた。まだ五時前なのに空はもう暗い。

本当に、もう、秋は終わったんだ…

目を伏せる。眠りたいわけではない。けれど、車内では誰も話さない。私も、一美さんも、おじさんも。誰もが言葉を忘れたように押し黙っている。四〇分の時間がやけに長く感じる。いや。長いのか、短いのか、時間の間隔がよく分からない。黙つてみたいわけではないが、何を話せばいいのか分からぬ。

今まで、人とどう話していたのだろう?

どうやって「ハリコニケーシヨン」としていたのだろう?

四〇分という時間を、私はどうやって過ごしていたのだろう?

窓から見える景色は、太陽が沈んだせいか、色がない。家もビルも、全てが暗い。

世界はこんなにも色がなかつたのだろうか?

今、わたしの目に映る景色は、前からこんな色をしていたのだろうか?

すべてがモノクロームの世界。すべては黒と白と灰色でできている。時折、明るさを求める街のネオンが目に入る。

眩しくなって、また、目を閉じる。

「タ」飯できたら呼ぶわね それまで好きに部屋 見ていて

「は」 ありがとうございます」

「美さんはそう言つとキッチンへ入つて行つた。おじさんは奥の部屋へ先に行つてしまつた。私は階段を上がつて、二階のイチの部屋へ向かつた。久しぶりのイチの家。何も変わらない。イチがいないこと以外。

そり.. 何も。悲しいほどに。

扉を開けると、やはり何も変わらないイチの部屋があつた。  
机も、テレビも、オーディオも、本棚も、ベッドも。すべては変わらずにそこにある。

机の上に無造作に置かれた数学の教科書、床に積まれたままの週刊雑誌、脱いだままのジーンズ、そして、ベッドの枕元に置かれた写真たて。

ベッドに座り、写真を手に取る。そこには無邪気に笑うイチと私がいた。

何も知らずに、春の暖かな太陽の下で、幸せそうに笑つている。  
それほど前のことではないのに、もう、ずっと昔のことと思える。

「イチ」

## 世界は艶やかだ。

セリの鳴く声がきこえる7月、わたしとイチは高校一年生で同じクラスの隣の席だった猛暑が予想される夏を目前に控え、長い休みを前に、そわそわしながらみんな、授業を受けていた。来週から期末テストが始まる。

「…つまり この公式をあてはめるわけだ わかるかー?次の問題を…鷺沼 ? 鷺沼君?」

「…あのーえっと…先生 鷺沼くん 寝てます」

先生が何度も呼んでも、イチは起きなかつた。

「またか つたく しじうがないやつだなー 来週から試験期間だつてのに」

先生がイチを起しきじょうとした瞬間、授業の終了を告げるチャイムが鳴つた。

「つたく しじうがないな 白木 おまえから後で注意しといてくれ では授業はこれまで 今日は特に連絡事項はないから ホームルームもないそうだ 気をつけて帰れよ」

先生が教室を出たあと、次々とみんな帰つて行つた。

「鷺沼くん 鷺沼くん」

イチは全く起きる気配がない。この蒸し暑い中、よくこんなにもすやすやと気持ち良さそうに眠れるものだな、と変に感心してしまつた。

「あれー? 夏夜帰んないの?」

「うん もうちょっと残つてくー先帰つてて」

誰もいなくなつた教室で、私は一人、持つていた雑誌を読んだり、英語の課題を解いたりしながら時間を潰していた。

放課後の教室、グラウンドからは野球部が練習しているのか、金属

バットの音がきこえる。

風が少し出でたのか、窓のカーテンが揺れる。

プラスバンドの練習音が、風にのって、微かに流れてくれる。  
この一年棟には誰もいないのか、私が雑誌をめくる音が、やけに大き声こえる。

「…し…らき?」

「ん?あ。おきたー?」

ようやく、イチが寝ぼけながら目を覚ました。

「え?なに?え?どうして?」

起きたのはいいが、まだ状況がはつきりと飲み込めていないので、誰もいなくなつた教室を見回しながら、一人で焦っていた。

太陽は傾き、オレンジ色に教室を染め始めている。

プラスバンドの音はきこえなくなつていた。

「もう放課後だよ 鶩沼くん寝すぎ。どんだけ起こしても起きない  
んだもん」

フフッとわたしが笑う。

私の説明を聞いて、ようやく状況を理解したようだ。

野球部のグラウンド整備の音が聞こえる。

「あーそっか ジめん 待つてくれたん?先帰つてよかつたのに  
照れて笑いながら、しかし、申し訳なさそうに頭をかきながらイチ  
はわたしを見た。

私は読んでいた雑誌と英語の教科書をカバンにしまった。

「んーでもさ 起きたとき一人じゃさみしいでしょ?あと先生が注意しあげてさ」  
笑いながら席を立つた。

「じゃ、また明日ねーばいばい。」

「…あ！待つて白木！」

教室を出ようとした瞬間、いきなりイチが立ちあがって叫んだ。

「一緒に帰ろう 送つてく」

思えば、これが始まり。

照れて頭をかくイチの顔は窓かられる西日がきつくて見えなかつた。オレンジ色の夕日が、わたしの顔を照らしていた。

「え？」

「だから、俺と付き合いませんか？」

銀杏が黄金色に、紅葉は赤く色づいた秋の公園、空はどこまでも高く、青く澄んでいた。

「…はい。」

わたしの顔も赤く色づきながら、一人で顔を見合せて笑つた。

秋 初めて手を繋ぎながら、学校からの帰り道、照れくさくて、何度も顔を見合せてうれしくて笑いあつた。

「安物だけど そのうちちゃんとしたのあげるから」

「ありがとう 大事にする」

クリスマスには指輪をもらつた。

街のイルミネーションは赤や黄色やピンク、青に緑。キラキラして、とてもキレイで。

幻想的な夢の世界。

その中をイチに貰つた指輪をはめて、手を繋いで歩けることを、すごく幸せに感じた。

冷たい手をイチが握つて、温めてくれる。

白い息をはきながら、二人で並んで座る。満天の星空。

冬 初めてのキス。ぎこちなかつたけど、これ以上ないくらい幸せだった。この幸せが続くことを、星に願つた。

春空に笑い、夏空に泣いて。

「クラス、離れちゃったね 残念。」

「まあ 隣やからいーやん」

ピンクに色づいた桜は、今が見ごろと言わんばかりに満開に咲き誇つている。

学校へ続く坂道は見事な桜並木。

自転車を押しながら歩くイチの隣。

これからもずっと、イチの隣にいられると思っていた。ずっと一緒に根拠はなく、無邪氣に信じて疑わなかつた。

「そういえば イチ 進路 どうするの？決めた？」

私たちの通っている高校は、県内で一番田くらゐに進学率のいい学校だつた。

当然、多くの生徒は高一の夏ごろまでに進路を決めていた。わたしも家から一番近い国立大学の文学部を第一志望に決めていた。

イチはとつと、一年進学時の文理選択で、数学が嫌いだから、という理由で文系クラスを選択していた。

「あー…うん。」

素つ気なく返事をするイチ。そっぽを向いて、頭をかいている。

「え？ なに？ どこのへ気になるー。」

「なーーいしょっ」

「なにそれ！ 教えてくれてもいいーじゃん」

「…」

一瞬口を開き、何かを言いかけた。が、すぐに口を閉じてしまった。

「また今度、教えるから。」

そう言って、わたしの頭を軽くたたいた後、イチはもう進路の話に触れなかつた。

わたしは内心、面白くなかったが、一週間後、このときのイチの態度の意味を知った。

「悪いな 白木 このプリント朝のホームルームで配つてくれ  
はーい これ何ですか？アンケート調査？」

朝の職員室。今日は日直で教室の鍵を開けなければいけないから、いつもより三〇分も早く家を出た。

職員室には、わたしのクラスの担任はまだ姿がなく、数人の先生がコーヒーを飲んでいた。

「そういや白木 よかつたな 鶩沼の進路決まって 先生も安心したよ」

わたしとイチは、とくに隠れて付き合っていたわけではないので、だいたいの生徒が付き合っていることを知っていたし、先生たちも、わたしたちの関係を知っていた。

「はい ありがとうございます」

本当はまだ知らないけど、なんとなく知らないとは言いたくなかつたから、先生に話を合わせた。

キー ボックスから教室の鍵を取り、閉めた。

「あいつはやればできるのに 本当にやる気がないからな 困ったやつだ」

イチは普通に賢い。といつか要領がいい。寝ていてもなぜかテストは解けている。

「しかし あいつが教師になりたいとはな あんな授業中寝てばっかのやつが ま よかつたな がんばって一人で受かるといいな そしたら来年の春からも一緒にいられるしな」

そう言って、先生は空になつたコーヒーを注ぎに行つてしまつた。

わたしはすぐに職員室を出た。そして教室の鍵を開け、げた箱へ向かつた。

ぽつぽつと生徒が登校してくる。イチはいつも遅刻ぎりぎりに登校していくが、今日はわたしが日直だから、いつもよりは早く来てくれるはずだ。

五分、待つか待たないかぐらいいに自転車に乗りながら眠そうに登校してくるイチの姿が見えた。

わたしはげた箱で靴を履きかえ、自転車置き場へと向かつた。

「イチー！」

自転車の鍵をかけながら、いきなり呼ばれたイチは驚いてわたしを見た。

「なに？ どうしたん？ おはよー！」

驚きながら、しかし、声の主がわたしだと気づいて笑顔でこちらを見た。

イチは笑うと小さな「じ」もみたい。わたしはこの笑顔が何よりもすきだった。

「ふふ 青島先生から聞いたやつたーイチの進路。」

わたしはいたずらつ子のように笑いながら、後ろで手を組みながらイチに近づいた。

「そんなにわたしと一緒にいたかったのー鷺沼くん」

イチは一瞬目を大きく開けたかと思うと、小さな声でやられた、とつぶやき、手で顔を覆つた。

「まじ 青センのやつ…勘弁してくれよなー」

頭をかきながら、わたしを見て、イチは恥ずかしそうだった。

わたしはそんなイチがかわいくて、おもしろくて、嬉しくて、笑つた。

その日の帰り、日誌を書き終わるのをイチは一緒に待つてくれた。

日誌を提出して、いつものように並んで帰る。夕暮れの桜並木の道には、他の生徒はなく、わたし達二人の貸し切り状態だった。

春 一人で笑い合つ未来を願つた。来年の今頃も手をつないで、桜の下を歩けるように。

高校三年生は忙しい。進路希望提出のための個人面談、それが終わつたかと思うとすぐに体育祭の準備だ。

わたしはクラブに所属していなかつたが、イチはサッカー部に所属していたため、高校最後の大会に向けての練習もあつた。そして、休日は補講と模試がある。

「なかなか遊びに行けないね」

その日は嫌なほど暑く、キレイな青空と白い大きな入道雲が、青と白のコントラストを描いていた。

わたしがもらした一言は、イチを困らせた。

サッカーの大会を間近に控え、練習も追い込みに入っている。

別にイチを責めるつもりで言つたわけではなかつた。

しかし、受験勉強と部活をしなければならないこの状況で、精神的ストレスのたまっていたイチには、わたしの一言は無責任すぎた。

「しかたないやん わがまま言つなって」

「別にわが今まで言つたわけじゃないよ！ たんに思つたこと言つただけ」

イチに言い方に少しムッとしたわたしは、つい口調が強くなつてしまつた。

それがさうで、イチをイラつかせる原因になつた。

『一度くらいケンカはしておいた方がいい。長く付き合いたいのなら。』

そんな言葉を聞いたことがある。しかし、やはりケンカに樂しいことなど一つもない。

この些細なきつかけで始まつたケンカとも言えないような言い合いは、この後一週間ほど“口をきかない”といつ形で続いた。

今思つと、本当にぐだらないうちが、あの頃はずゞく大きなことに思えた。

それが大人になつた、ということなのかも知れぬけれど、あの時の純粋な自分を、少しうらやましく思う。

ケンカ中にイチの試合は行われた。

真夏の炎天下。すつきりと晴れ渡つた青空から、太陽は容赦なく、選手を照らした。

向日葵が空を見上げる。

イチに気づかれないようにこいつそりと、わたしは応援していた。

向日葵が太陽を追いかけるように。

夏　　はじめてのケンカ。隣に君がいることは特別なことなんだと認識した。

## 秋風に揺れるコスモス。

「先月の模試の結果返却された? どうだつた?」

最後の夏休みが終わり、文化祭も体育祭も終わった10月半ば。校内は受験モード一色だった。

毎週のようにテストや模擬試験が行われ、センター試験対策講座も始まつた。

不確かな未来ほど不安なものはない。

半年後の自分のいる場所がわからない。  
自分の進むべき道が正しいのか、  
間違つっているのかすらわからない。

混沌とした思いを抱えながら、私たちは進まなければならぬ。

「B判定 英語が下がった 夏夜は?」

「ギリギリに入つたとこ…今回けりゅうと自信あつたのに

黄金色に色づいた銀杏並木を眺めながら、どんよりと曇つた空を見上げ、溜息をついた。

「いやな雲。」

まるで今の自分を表わしているかのような天気。ますます気分が落ち込んでいく。

「イチは頭良くていいなー」

ポツリと呟いて、俯く。

まだ2か月ある。

しかし、氣ばかりが焦つてどうしようもならない。

イチを責めたいわけではないのに。  
イチと同じ大学に行きたいだけなのに。

表情も自然と暗くなつていぐ。

そんなとき、いつもイチは前向きに励ましてくれる。

「あとちょっと一緒にがんばる」

そう言つて、頭をなでて、笑ってくれる。

自分だつて、同じ立場で大変なのに。

「息抜きにここと連れてつてやるよ」

いつもの帰り道からそれで、イチが連れてきてくれた場所は、一面、花で埋め尽くされた川原だつた。

「キレイ……何これ……コスモス?...すゞ...満開!...」  
薄いピンクに、濃いピンク、白。

見渡す限り、コスモス畑が広がつている。

「だろ?」この間偶然通つて見つけた 絶対喜ぶと思つてさ」

笑うイチを見て、泣きそつになつた。

自分のことでこっぽいこっぽいな自分。

相手を思いやる余裕が持てない。

イチはこんなにも私のことを思つてくれるので。

「ありがとう 元気出た!」

泣きそつになるのをじらえて、精一杯笑つた。

雲間から、一筋の光がさしている。

秋風にコスモスが揺れる。

秋　　強くて優しい人になりたいと思った。あなたのようにな。何  
があつてもめげないようにな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3032f/>

---

夢のむこうに。

2010年10月28日08時29分発行